

## 資料編

---

## 用語解説

## 【ア行】

**亜種(あしゆ)：** 同じ種の生物が、地理的な要因などによって隔てられた結果、形態などが異なることがあり、その集団を亜種という。亜種どうしはお互いに交配して子どもをつくることが可能である。

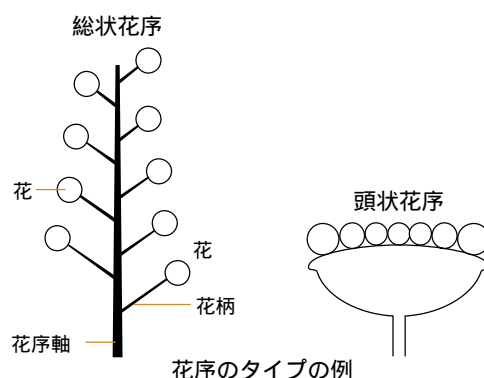
**一年生(いちねんせい)：** アレチウリのように発芽して1年以内に死んでしまうものを「一年生」、カワヂシャのように秋に発芽して翌春に開花、結実して死んでしまうものを(年を越すことから)「越年生」という。カワヂシャには一年生のタイプのものもみられる。また、オオキンケイギクやオオハンゴンソウなどの様に1年を越えて生存するものを、「多年生」という。

**遺伝的攪乱(いでんてきかくらん)：** 分布域が大きく離れ、自然状態ではおこり得ない遺伝子の交流(交雑)によって、種としての固有な遺伝子構成が変化し、純粋性が失われてしまうこと。遺伝子汚染(いでんしおせん)とも呼ばれる。

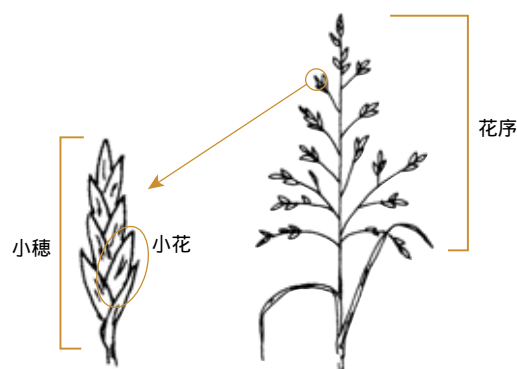
**永続的土壌シードバンク(えいぞくてきどじょうしーどばんく)：** 土の中で発芽せずに生きている種子の集団のことを土壌シードバンク(種子の銀行)、または、埋土種子集団(まいどしゆししゅうだん)という。種子が散布されてから最初の発芽季節までの期間のみ土壌中に維持される「季節的土壌シードバンク(散布された種子が1年以内に発芽)」と、散布された種子の一部が最初の発芽季節を過ぎても発芽せず、土壌中に残存する「永続的土壌シードバンク(種子は休眠状態を維持したまま数年から数十年にわたり土中の保存される)」のふたつのタイプに分類される。

## 【カ行】

**花序(かじょ)：** 花の集合や、その配列の仕方のこと。枝の分かれ方などから、いくつかのタイプに区別される。「頭状花序(頭花)」は、円盤状の軸の上などに多くの花が集まってひとつの花のように見える。また、花序を構成するひとつひとつの花を、「小花」という。



花序のタイプの例



花の構造 (例:イネ科の花)

**環状剥皮(かんじょうはくひ)：** 木の幹の樹皮を形成層ごと環状に剥がすこと。環状剥皮を行うと、葉でつくられた栄養が下方へ送られず、木が枯れる。「巻き枯らし」ともいう。ハリエンジュの除去手法のひとつとして検討が行われている。

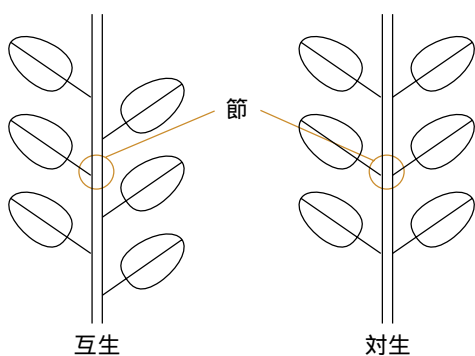
**奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)：** 葉身が複数に分かれているものを複葉といい、複葉を構成する個々の葉を小葉という。複葉にはいくつかの形態があり、中央に軸があって左右に小葉が並ぶものを羽状複葉、その先端に小葉があるものを奇数羽状複葉という。ハリエンジュの葉はこれに該当する 葉身(ようしん)のイラストを参照。

クローン成長(クローンせいちょう)：多くの種子植物は、種子繁殖などの有性生殖のほかに、栄養繁殖を行うことが知られており、それらはクローナル植物と呼ばれる。栄養繁殖は、成長点の分裂組織から体細胞分裂によって新しい植物体を生じる繁殖様式である。

こうした生産様式を「栄養繁殖」とする見方や、ひとつの植物体から形成されたものは遺伝的には同一な個体であることから、「クローナル成長(クローン成長)」とする見方がある。本書では、記載を「クローン成長」に統一して用いた。ハリエンジュやセイタカアワダチソウ、ボタンウキクサなど、本書に記載した種の多くがクローン成長を行う。

交雑(こうざつ)：生物どうしが受粉、受精などを行って子孫をつくることを「交配」という。「交雑」とは、別種間で交配がおこることで、結果として「雑種」が形成される。

互生(ごせい)：葉のつき方のことで、茎の節に互い違いに1枚ずつつくものを「互生(セイタカアワダチソウなど)、2枚の葉が向かい合っつくものを「対生(オオカワチシャ)」という。



根出葉(こんしゅつよう)：地面に近い位置にあるため、地中の根から出ているように見える葉。「根生葉(こんせいよう)」ともいう。

根粒(こんりゅう)：根に根粒菌(根瘤菌)と呼ばれる細菌が侵入してつくられる粒状の構造物を根粒という。根粒菌は宿主となっている植物と共生し、窒素同化作用を通じて空中窒素を固定することで知られる。根粒菌には多くの種類があり、ハリエンジュなどのマメ科植物には普遍的にみられる。

根粒菌(こんりゅうきん)：根粒(こんりゅう)を参照。

## 【サ行】

種(しゅ)：生物を分類する階級のひとつ。生物は「種」を基本として、それぞれそのうえの階級(主に属、科、目、綱、門)に分類される。例えば、米は、緑色植物門、被子植物綱、イネ目、イネ科、イネ属の「イネ」という種である。

小花(しょうか)：花序(かじょ)を参照。

小穂(しょうすい)：花序(かじょ)を参照。

節(せつ)：茎のうち、葉がついている部分(互生のイラストを参照)。

属(ぞく)：種(しゅ)を参照。

## 【タ行】

対生(たいせい)：互生(ごせい)を参照。

托葉(たくよう)：葉身(ようしん)を参照。

多年生(たねんせい)：一年生(いちねんせい)を参照。

地下茎(ちかがい)：茎の中でも、地上にあらわれないものを「地下茎」という。地下茎は、ジャガイモや球根のように、栄養を蓄えて太くなることがある。また、地中を伸びていき、その先に新しく地上部をつくって増える種もある。クローン成長(くろんせいちょう)を参照。

窒素固定(ちっそこてい)：生物的に空中の窒素( $N_2$ )を還元し、生物が利用可能なアンモニアを作る過程のこと。マメ科やハンノキ属などの植物は、窒素固定能力をもつ根粒菌(こんりゅうきん)と共生することで、共生的窒素固定を行っている。

頭花(とうか)：花序(かじょ)を参照。

特定外来生物(とくていがいらいせいぶつ)：外来生物法によって、輸入や飼養などが規制される生物(生きているものに限られ、個体だけではなく、卵、種子、器官なども含まれる)。生態系、人の生命や身体、農林水産業に大きな影響を及ぼすものが特定外来生物として指定されるが、選定にはいくつかの前提条件があり、国内外来種や明治以前に導入された種などは選定の対象外となっている。

土壌シードバンク(どじょうしーどばんく)： 永続的土壌シードバンク(えいぞくてきどじょうしーどばんく)を参照。

### 【ハ行】

複葉(ふくよう)： 奇数羽状複葉(きすうじょうふくよう)を参照。

萌芽(ぼうが、ぼうが)： 新しく、または幹が伐られたり折れたりした後に、株や根から芽が吹き出すこと。または吹き出した芽、あるいは新梢のこと。

### 【マ行】

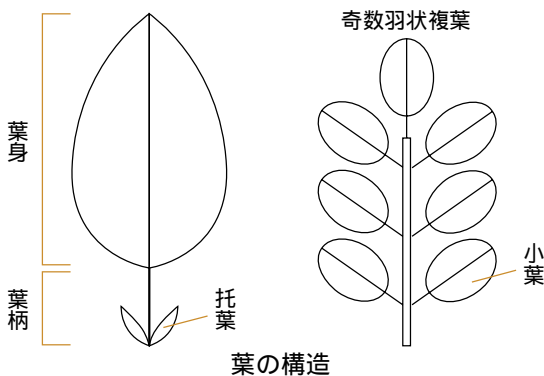
巻き枯らし(まきがらし)： 環状剥皮(かんじょうはくひ)を参照。

実生(みしょう)： 種子から発芽し、生育した植物。芽生え。

### 【ヤ行】

優占(ゆうせん)： ある地域にみられる生物の集まりを代表するような種を「優占種」という。例えば、ある植物の集まりの中で、優占種は最も量が多いことが目に見え明らかであったり、他の植物に強い影響を与えることもある。

葉身(ようしん)： 葉は葉身と葉柄からなる。葉柄には小さな葉のようなものがつく場合もあり、これを托葉とよぶ。



要注意外来生物(ようちゅういがいらいせいぶつ)： 外来生物法の規制が課されるものではないが、生態系に悪影響を及ぼしうることから、利用に関わる個人や事業者などに対し、適切な取り扱いについて理解と協力について啓発を行うとして環境省が選定した外来生物。その特性から右

記の ~ のカテゴリーに区分されている。

被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物

被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物

選定の対象とならないが注意喚起が必要な外来生物(他法令の規制対象種)

別途総合的な検討を進める外来生物(緑化植物)

### 【ラ行】

レッドリスト： 環境省では、日本の絶滅のおそれのある野生生物について、分類群ごとにレッドリスト(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)を作成・公表し、これをもとにレッドデータブック(日本の絶滅のおそれのある野生生物の種についてそれらの生息状況などを取りまとめたもの)を編纂している。本書では、環境省より公表されている最新のレッドリストの内容を引用した(平成20年(2008年)12月現在)。本文中に記されているカテゴリーの意味は以下の通り。

絶滅危惧 A類(ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種)

絶滅危惧 B類( A類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種)

絶滅危惧 類(絶滅の危険が増大している種)

準絶滅危惧(現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可のある種)

情報不足(評価するだけの情報が不足している種)

ロゼット： 茎の節間がつまって葉が重なりあって叢生し、放射状に配列しているものをロゼットという。